

福岡県がん診療連携協議会がん登録専門部会

院内がん登録解析

がん対策の最大の目標は、がんによる死亡を減少させることにあり、そのための有効な手段の1つはがん検診受診率の増加である。しかしながら、福岡県のがん検診受診率は、肺がん、大腸がん、胃がん、乳がん、子宮頸がんいずれも全国平均より低い(福岡県がん対策推進基本計画より)。

2008年の院内がん登録全国集計では、がん全体で、検診によるがん発見率は10.9%と全国でも2番目(第46位)と低く、肺がん(第46位)、胃がん(第43位)、大腸がん(第45位)、乳がん(第36位)、子宮頸がん(第45位)、前立腺がん(第33位)と何れのがんでも下位に留まっている。

院内がん登録は、2008年から全国で開始され、福岡県がん診療連携拠点病院協議会がん登録専門部会では、全国でもトップクラスの登録数と予後判明率を達成してきた。

今回、主要ながんを対象にがん検診と生命予後に関する分析を行った結果、がん検診で発見された場合、殆どのがんにおいて、がんによる死亡率が明らかに低くなることが初めて判明した。

ここに、この結果を公開し、がん検診の意義が広く県民に理解され、福岡県のがん検診受診率が増加し、がんによる死亡率が減少することに期待したい。

《対象条件》

【対象年】 院内がん登録データ 2009-2011年症例

【がん種】 胃・大腸・肺・肝・乳腺・子宮頸部・前立腺

【症例区分】 自施設診断・自施設初回治療開始、他施設診断・自施設初回治療開始

【臨床病期】 不明を除く

【組織型コード】 8000-8005、8010-8015、8020-8022、8030-8046、8050、8051-8084、8090-8110、8120-8131、8140-8149、8150-8157、8160-8162、8170-8180、8190-8221、8230-8231、8246-8247、8250-8255、8260-8337、8340-8347、8350-8551、8560-8562、8570-8576、8580-8671、8940-8941 ※前立腺は、8120-8131を除く

◎対象とする組織型は、国立がん研究センターの報告書に準拠した

【追跡期間】 ① 死亡例の場合は、死亡日の年月、生存例の場合は、生存最終確認日の年月) が不明の場合は集計対象からは除外

② 死亡例で死亡日の年月が不明であっても、生存最終確認日の年月が判明している場合は、生存最終確認日を追跡終了日として、打ち切り例として集計

《対象年別部位別データ数》

対象年	肺	胃	大腸	乳腺	子宮頸部	前立腺	肝	計
2009年	2,043	2,094	2,076	1,594	731	1,041	1,168	10,747
2010年	2,383	2,232	2,123	1,704	862	1,117	1,094	11,515
2011年	2,380	2,215	2,258	1,748	843	1,267	1,081	11,792
計	6,806	6,541	6,457	5,046	2,436	3,425	3,343	34,054

福岡県がん診療連携協議会がん登録専門部会

院内がん登録データ解析 【胃】

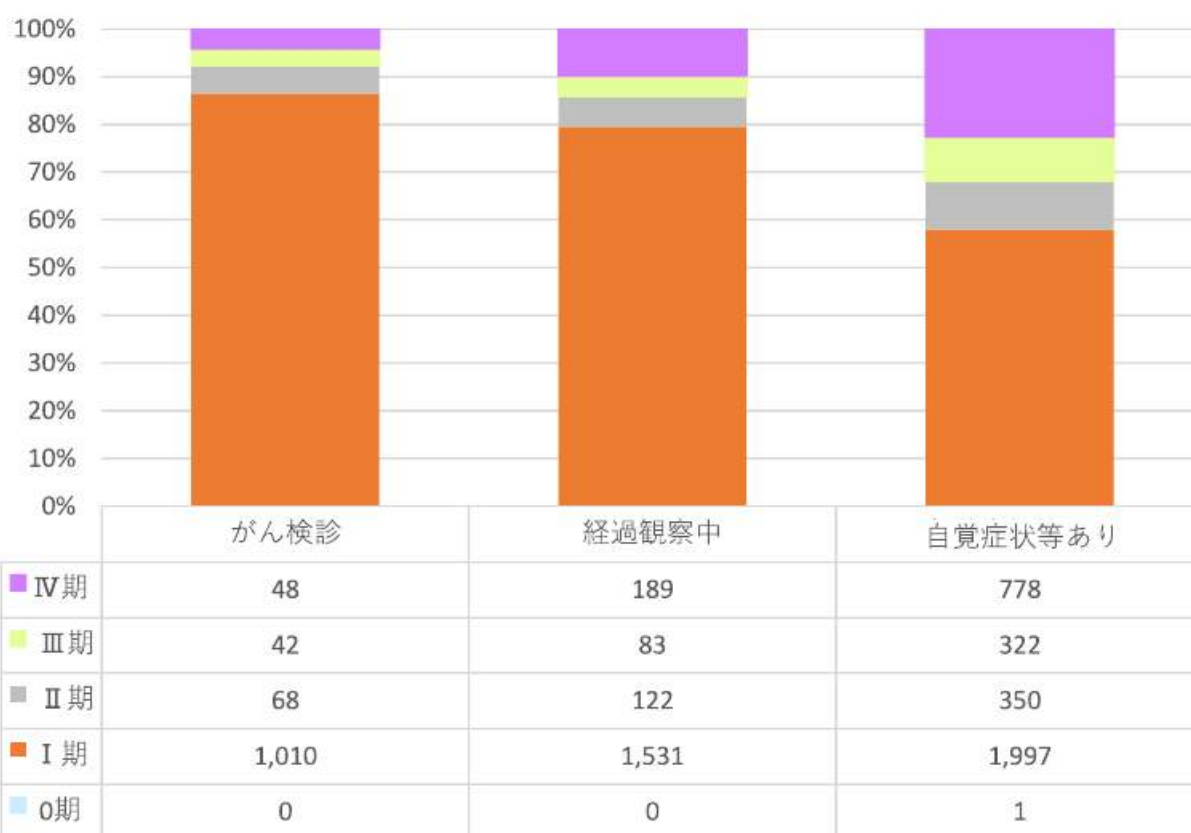
◎検診でみつける胃がんの進行度（臨床病期）

臨床病期	0期	I 期	II 期	III期	IV期	総計
がん検診	0	1,010	68	42	48	1,168
経過観察中	0	1,531	122	83	189	1,925
自覚症状等あり	1	1,997	350	322	778	3,448
総計	1	4,538	540	447	1,015	6,541

※ がん検診・・・健康診断、人間ドックを含み、胃がんが検診で見つかった症例

経過観察中・・・他の疾患のフォロー中に、がんの症状がない状態でみつかった症例

自覚症状等あり・・・食欲不振や吐き気、黒色便等自覚症状が有り、がんが見つかった症例

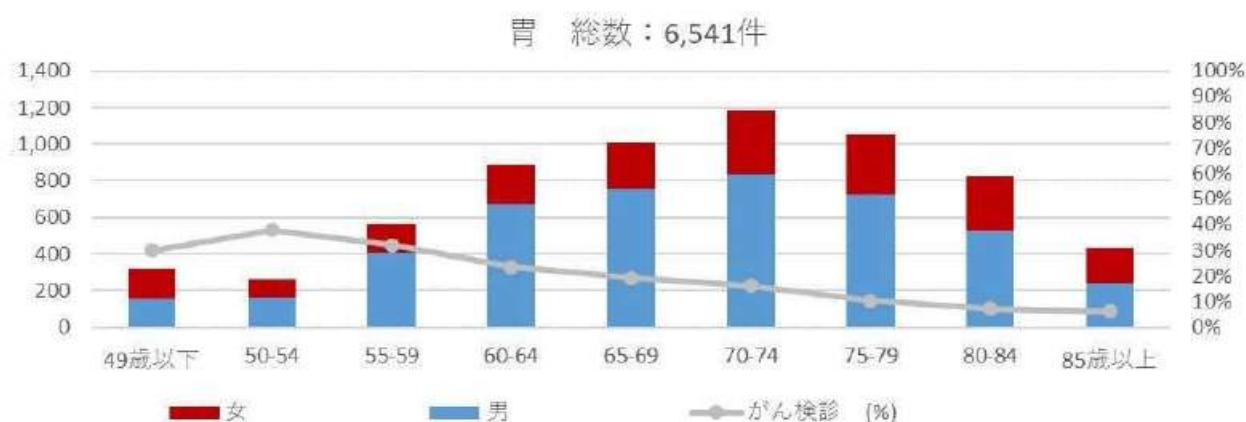


【解説】

3年間の対象症例数は6,541件で、がん検診での発見数は1,168件（18%）、経過観察中での発見数は1,925件、自覚症状等ありでの発見数は最も多く3,448件であった。

がん検診で発見された場合、臨床病期Ⅰ期が87%で、Ⅳ期が4%であったのに対し、自覚症状等ありで発見された場合は、臨床病期Ⅰ期が58%で、Ⅳ期が23%であり、がん検診で発見された場合、早期のがんが多く発見されていることが確認された。

◎胃がんの年齢別・性別発生数とがん検診による発見率



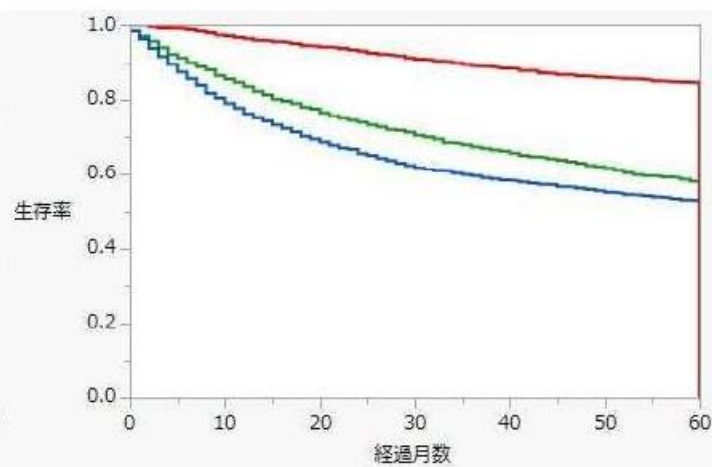
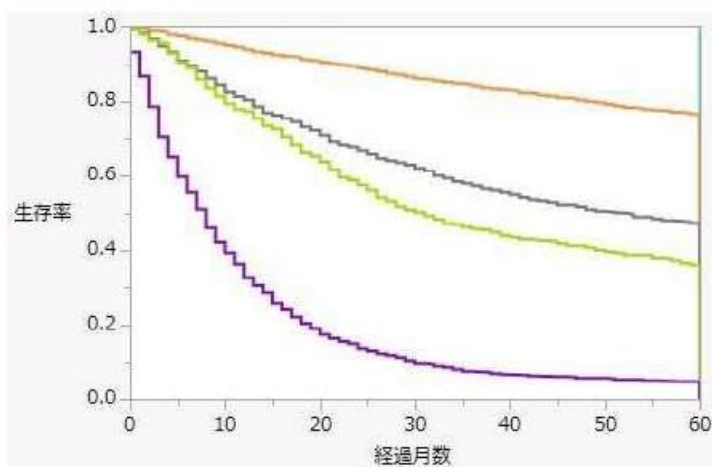
【解説】

胃がんの発生数は、男性が全体の68.6%と女性の2倍あり、年齢階層では50歳代後半から急速に増加している。一方、がん検診による発見率は、50歳代前半の38%をピークに減少し、70歳代前半からは、16%と発生数の増加と反対に明らかに減少している。

◎生存率 ※打ち切り190件除く

[臨床病期別]

[発見経緯別]



cStage 0
cStage I
cStage II
cStage III
cStage IV

がん検診
経過観察中
自覚症状等あり

【解説】

胃がんの5年生存率をみると、病期の進行に従い減少している。発見経緯別では、がん検診で発見された場合、明らかに生存率が高く、自覚症状等ありと比べると約1.6倍良好な結果であった。

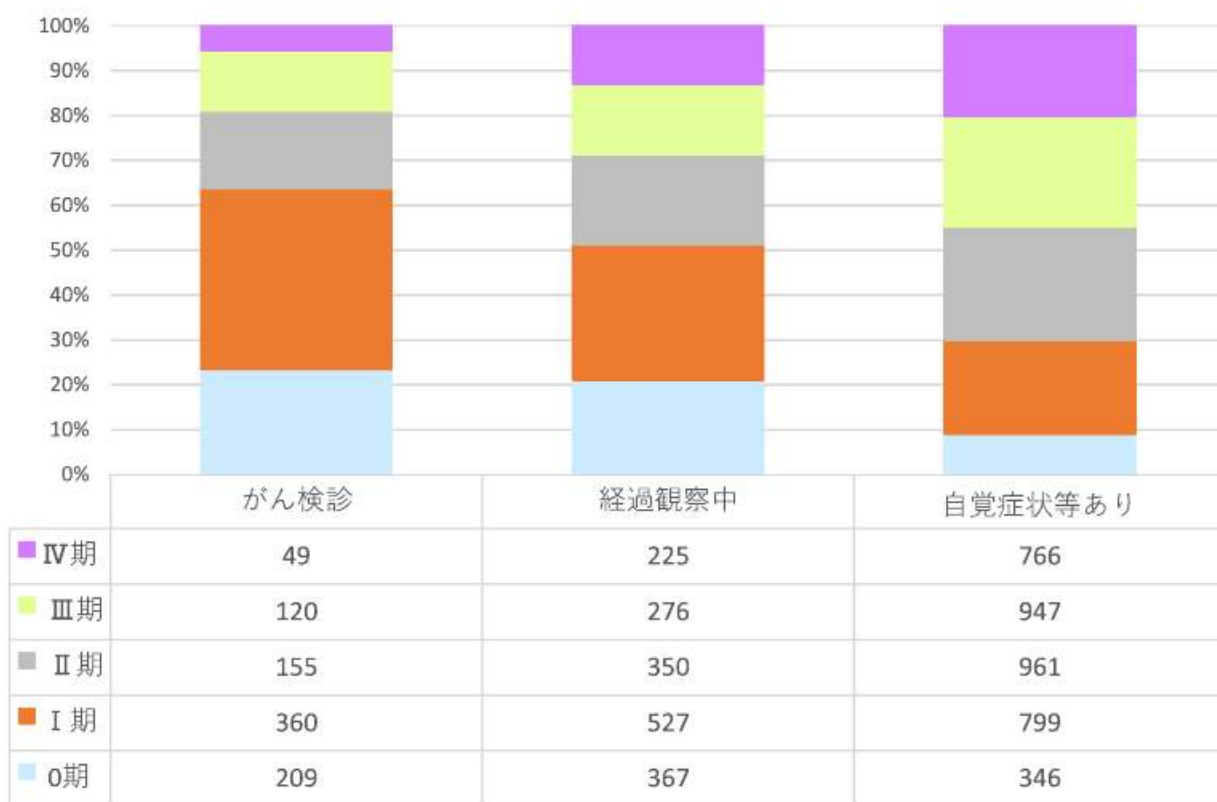
福岡県がん診療連携協議会がん登録専門部会

院内がん登録データ解析 【大腸】

◎検診でみつける大腸がんの進行度（臨床病期）

臨床病期	0期	I期	II期	III期	IV期	総計
がん検診	209	360	155	120	49	893
経過観察中	367	527	350	276	225	1,745
自覚症状等あり	346	799	961	947	766	3,819
総計	922	1,686	1,466	1,343	1,040	6,457

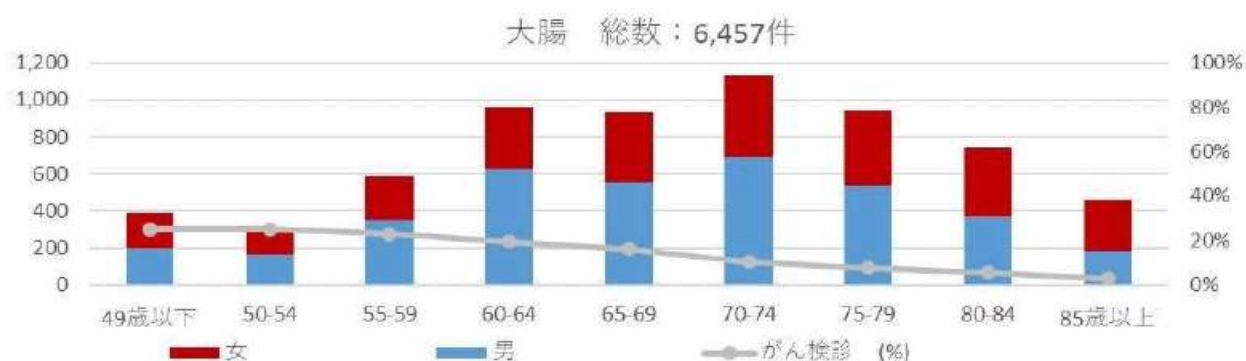
※ がん検診・・・健康診断、人間ドックを含み、大腸がんが検診で見つかった症例
 経過観察中・・・他の疾患のフォロー中に、がんの症状がない状態でみつかった症例
 自覚症状等あり・・・血便や下血、腹痛等、自覚症状が有り、がんが見つかった症例



【解説】

3年間の対象症例数は6,457件で、がん検診での発見数は893件（14%）、経過観察中は1,745件、自覚症状等ありでの発見数は最も多く3,819件であった。
 がん検診で発見された場合、臨床病期0期・I期で64%、IV期が5%であったのに対し、自覚症状等ありで発見された場合は、臨床病期0期・I期で30%、IV期が20%であり、がん検診で発見された場合、早期のがんが多く発見されていることが確認された。

◎大腸がんの年齢別・性別発生数とがん検診による発見率



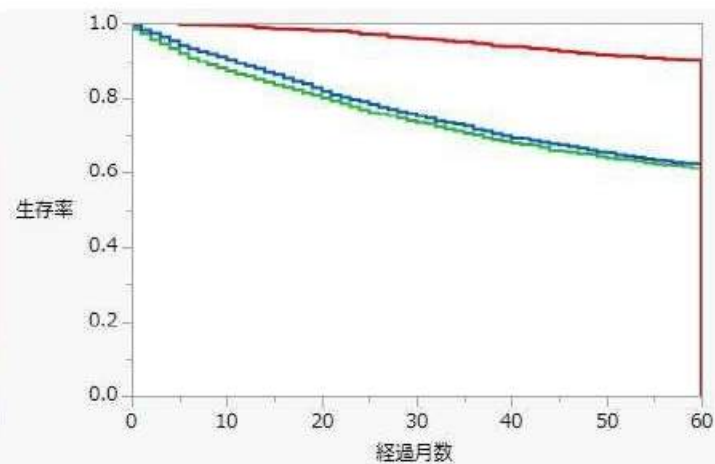
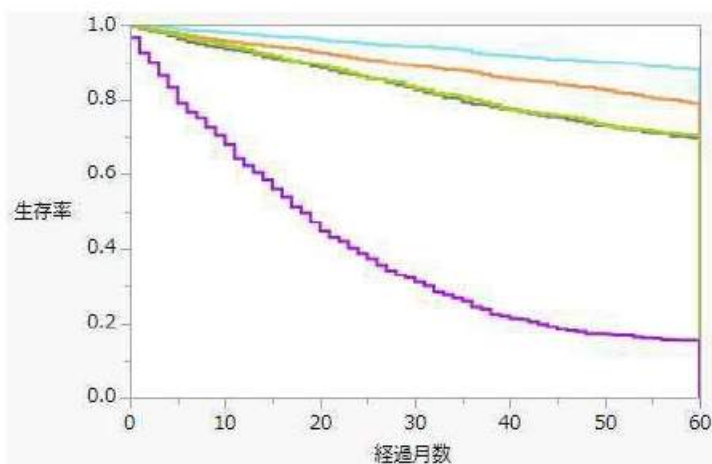
【解説】

大腸がんの発生数は、男性が全体の57%と女性の1.3倍あり、年齢階層では50歳代後半から明らかに増加している。一方、がん検診による発見率は、50歳代前半の25%がピークとなっており、年齢の上昇とともに、徐々に減少している。

◎生存率 ※打ち切り178件除く

[臨床病期別]

[発見経緯別]



【解説】

大腸がんの5年生存率をみると、0期・Ⅰ期とⅡ期・Ⅲ期の差は比較的小さい。発見経緯別では、がん検診で発見された場合、明らかに生存率が高く、経過観察中と自覚症状等ありの2つのグループと比べると約1.5倍良好な結果であった。

福岡県がん診療連携協議会がん登録専門部会

院内がん登録データ解析 【肺】

◎検診でみつける肺がんの進行度（臨床病期）

臨床病期	0期	I 期	II 期	III 期	IV 期	総計
がん検診	0	552	61	149	123	885
経過観察中	0	1,673	144	401	486	2,704
自覚症状等あり	1	768	195	809	1,444	3,217
総計	1	2,993	400	1,359	2,053	6,806

※ がん検診・・・健康診断、人間ドックを含み、肺がんが検診で見つかった症例

経過観察中・・・他の疾患のフォロー中に、がんの症状がない状態で見つかった症例

自覚症状等あり・・・胸の痛み、咳、息切れ、声のかすれ等、自覚症状が有り、がんが見つかった症例

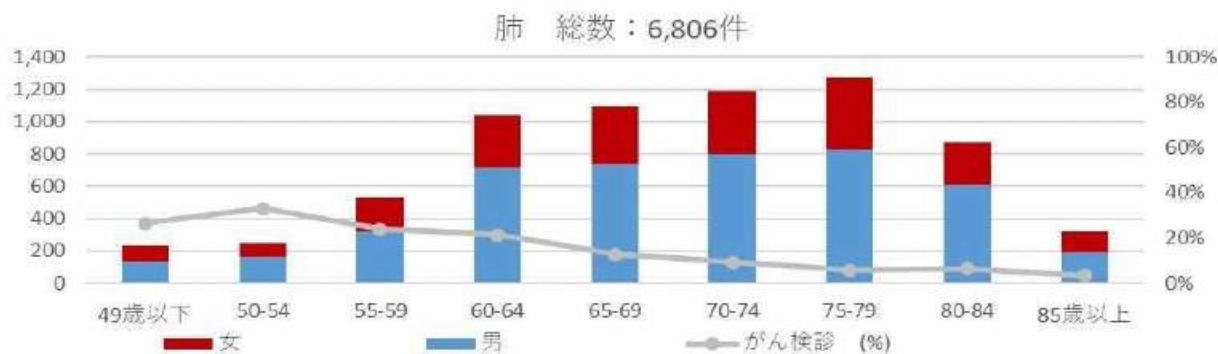


【解説】

3年間の対象症例数は6,806件で、がん検診での発見数は885件（13%）、経過観察中は2,704件、自覚症状等ありは3,217件であった。

がん検診で発見された場合、臨床病期I期が62%で、IV期が14%であったのに対し、自覚症状等ありで発見された場合は、臨床病期I期が24%で、臨床病期IV期が45%であり、がん検診で発見された場合、早期のがんが多く発見されていることが確認された。

◎肺がんの年齢別・性別発生数とがん検診による発見率



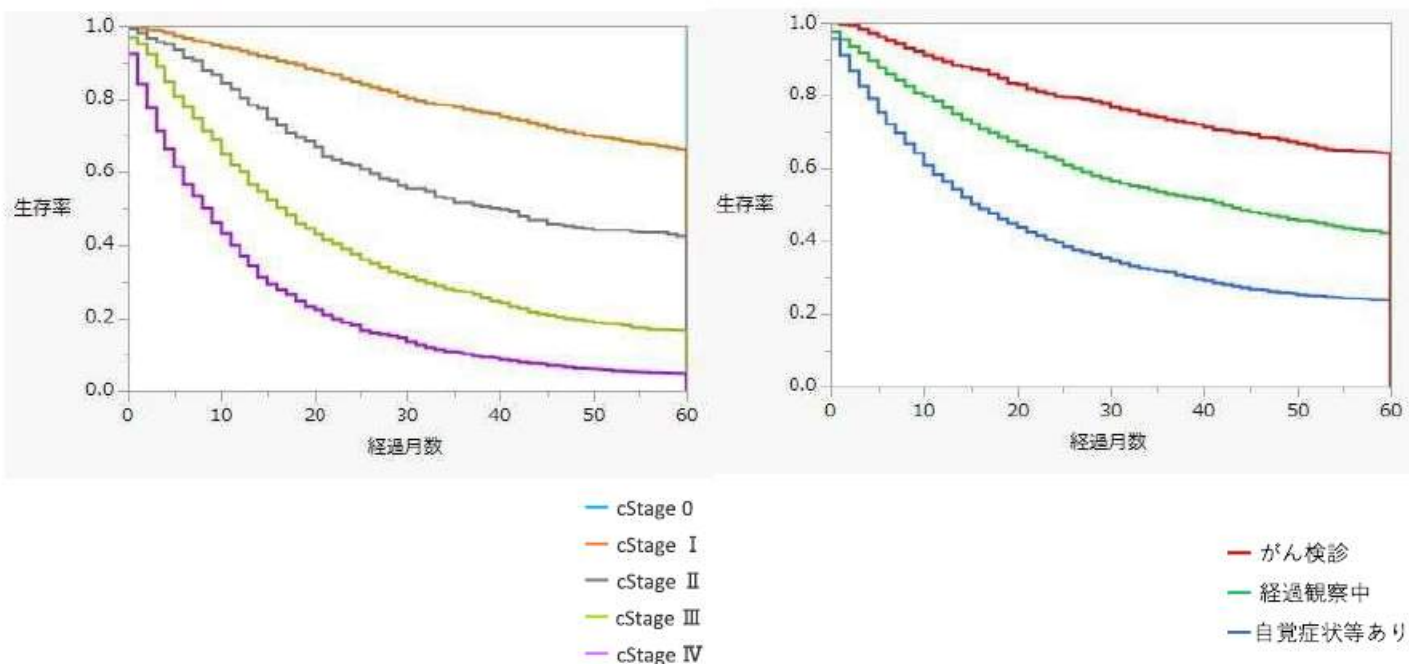
【解説】

肺がんの発生数は、男性が全体の66%と女性の2倍あり、年齢階層では60歳から急速に増加している。一方、がん検診による発見率は、50歳代前半の33%をピークに減少し、60歳代後半からは、13%と発生数の増加と反対に徐々に減少している。

◎生存率 ※打ち切り117件除く

[臨床病期別]

[発見経緯別]



【解説】

肺がんの5年生存率をみると、病期の進行に従い減少している。発見経緯別では、がん検診で発見された場合、明らかに生存率が高く、自覚症状等ありと比べると約2.7倍良好な結果であった。

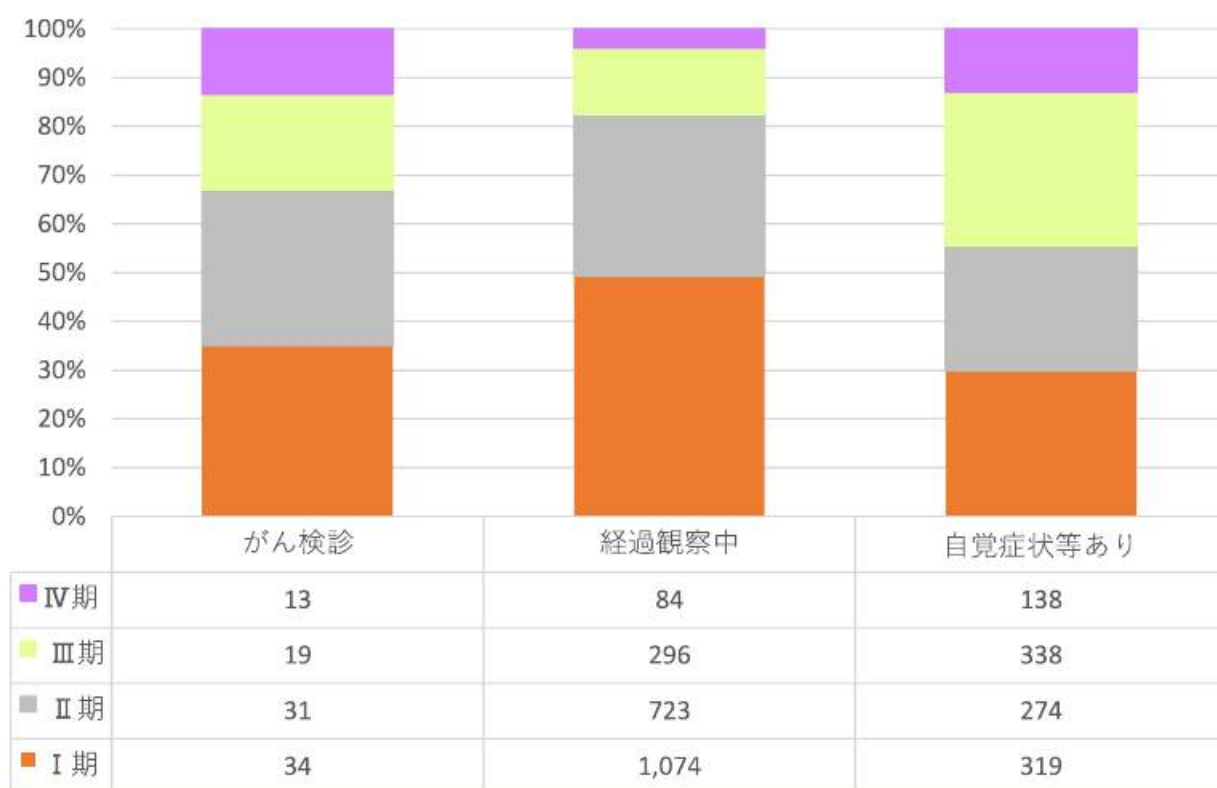
福岡県がん診療連携協議会がん登録専門部会

院内がん登録データ解析 【肝臓】

◎検診でみつける肝臓がんの進行度（臨床病期）

臨床病期	I 期	II 期	III 期	IV 期	総計
がん検診	34	31	19	13	97
経過観察中	1,074	723	296	84	2,177
自覚症状等あり	319	274	338	138	1,069
総計	1,427	1,028	653	235	3,343

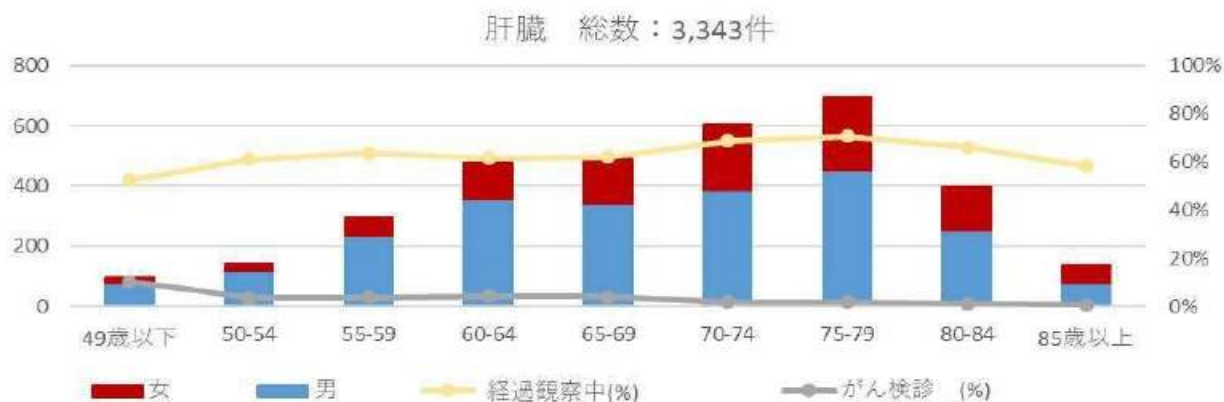
※ がん検診・・・健康診断、人間ドックを含み、肝臓がんが検診で見つかった症例
経過観察中・・・他の疾患のフォロー中に、がんの症状がない状態でみつかった症例
自覚症状等あり・・・腹部の圧迫感や痛み等、自覚症状が有り、がんが見つかった症例



【解説】

3年間の対象症例数は3,343件で、がん検診での発見数は97件（3%）と低く、経過観察中での発見数は2,177件（65%）、自覚症状等ありでの発見数は1,069件（32%）であった。
経過観察中に発見された場合、臨床病期Ⅰ期が50%で、Ⅳ期が4%であったのに対し、自覚症状等ありで発見された場合は、臨床病期Ⅰ期が30%、Ⅳ期が13%であり、経過観察中で発見された場合、早期のがんが多く発見されていることが確認された。

◎肝臓がんの年齢別・性別発生数とがん検診による発見率



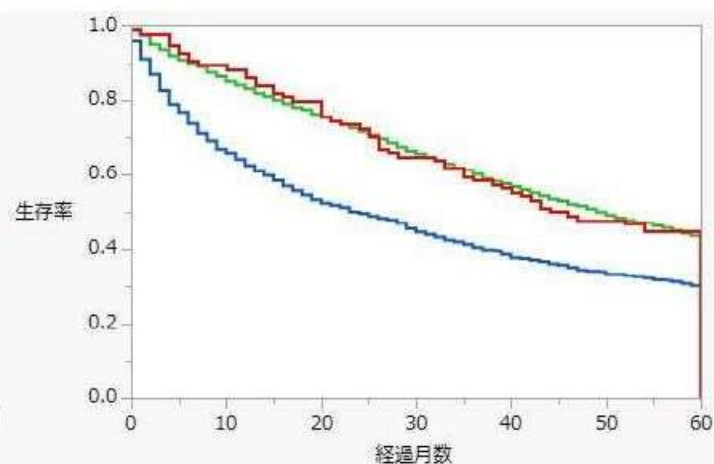
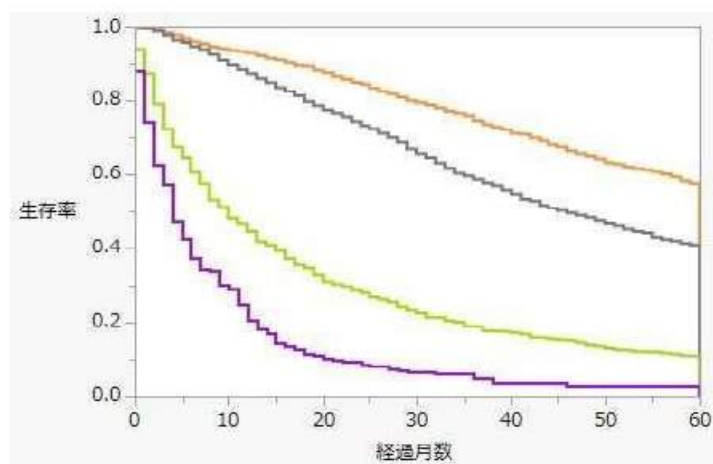
【解説】

肝がんの発生数は、男性が全体の69%と女性の2倍あり、年齢階層では60歳から70歳台までが多い。一方、がん検診による発見率は、全ての年代で低いまま推移している。

◎生存率 ※打ち切り64件除く

[臨床病期別]

[発見経緯別]



— cStage I
— cStage II
— cStage III
— cStage IV

— がん検診
— 経過観察中
— 自覚症状等あり

【解説】

肝がんの5年生存率をみると、病期の進行に従い、減少している。発見経緯別にみると、経過観察中で発見された場合、自覚症状等ありと比べると約1.5倍良好な結果であった。

福岡県がん診療連携協議会がん登録専門部会

院内がん登録データ解析 【前立腺】

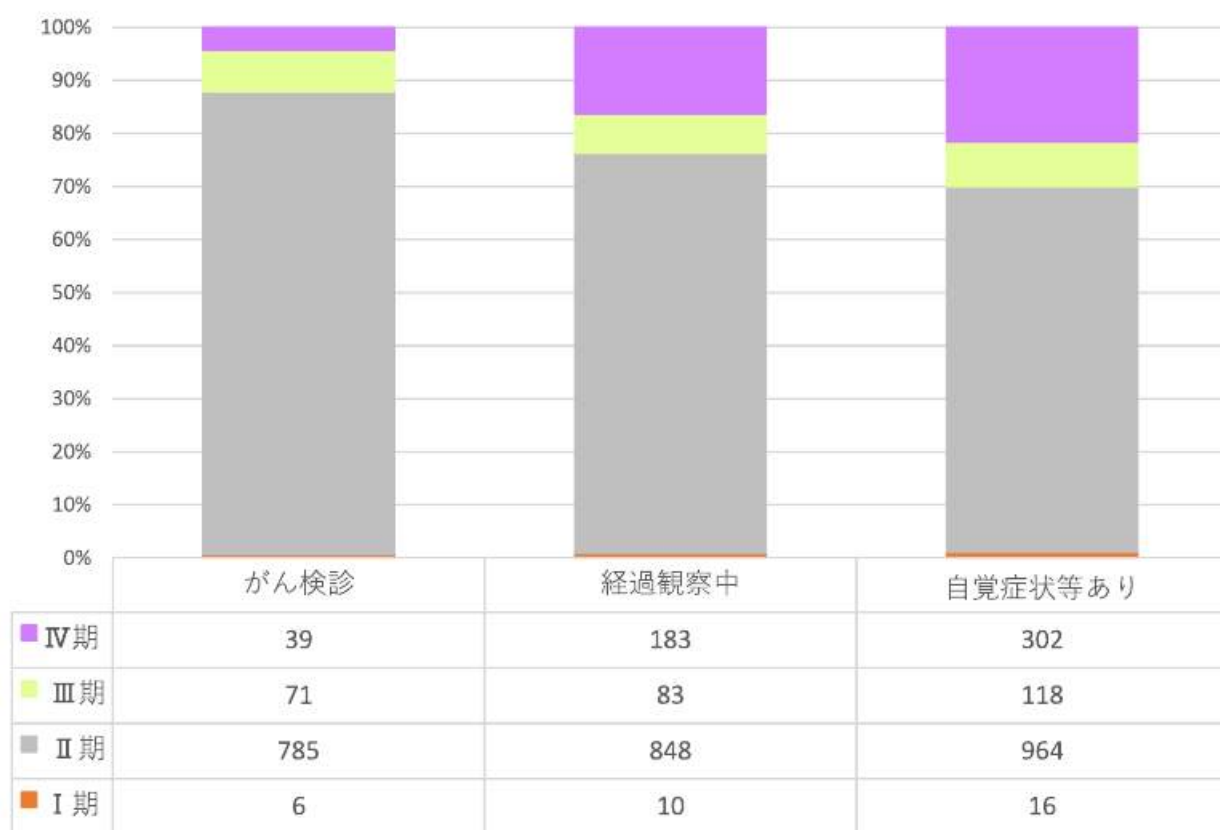
◎検診でみつける前立腺がんの進行度（臨床病期）

臨床病期	I 期	II 期	III 期	IV 期	総計
がん検診	6	785	71	39	901
経過観察中	10	848	83	183	1,124
自覚症状等あり	16	964	118	302	1,400
総計	32	2,597	272	524	3,425

※ がん検診・・・健康診断、人間ドックを含み、前立腺がんが検診で見つかった症例

経過観察中・・・他の疾患のフォロー中に、がんの症状がない状態でみつかった症例

自覚症状等あり・・・排尿の回数が多い、尿が出にくい等、自覚症状が有り、がんが見つかった症例

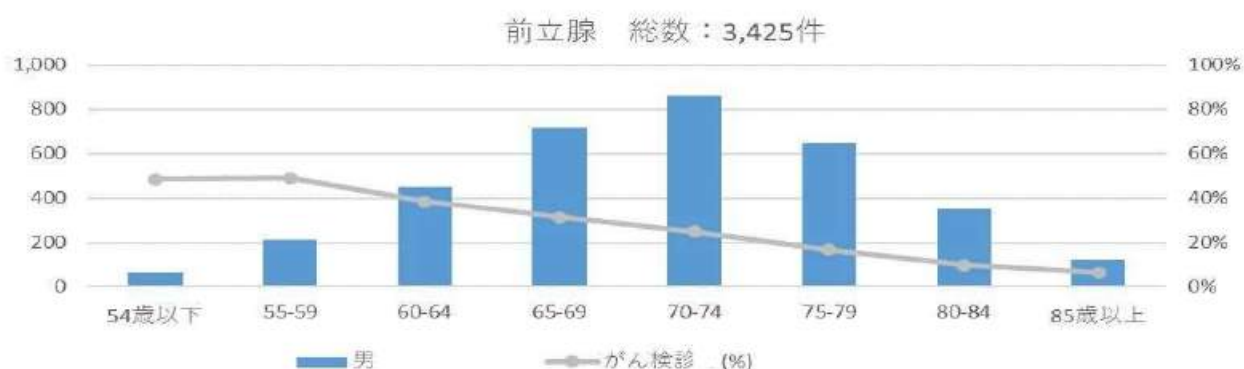


【解説】

3年間の対象症例数は3,425件で、がん検診での発見数は901件（26%）、経過観察中での発見数は1,124件、自覚症状等ありでの発見数は最も多く1,400件であった。

がん検診で発見された場合、臨床病期Ⅰ期・Ⅱ期が88%で、Ⅳ期が4%であったのに対し、自覚症状等ありで発見された場合は、臨床病期Ⅳ期が22%であり、がん検診で発見された場合、進行したがんが少ないことが確認された。

◎前立腺がんの年齢別・性別発生数とがん検診による発見率



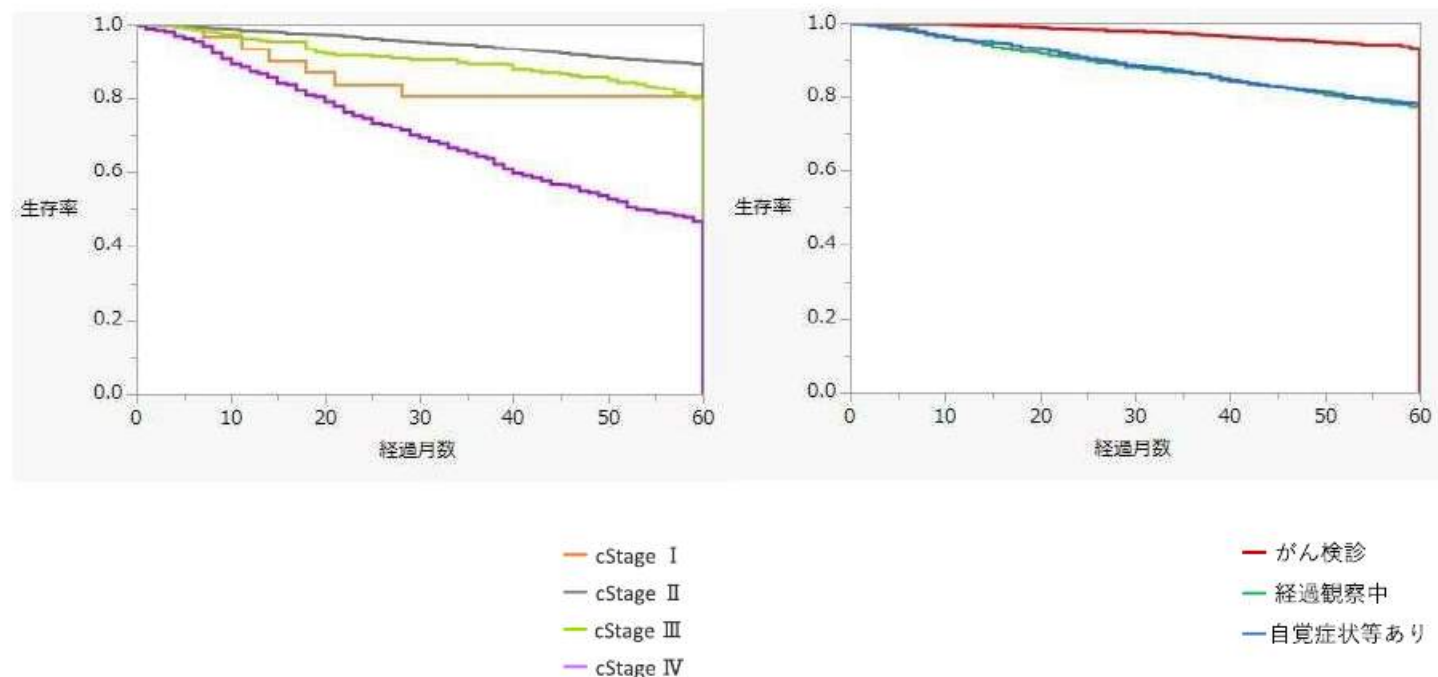
【解説】

年齢階層では60歳から増加している。一方、がん検診による発見率は、50歳代後半の49%をピークに減少し、70歳代前半からは、25%と発生数の増加と反対に明らかに減少している。

◎生存率 ※打ち切り111件除く

[臨床病期別]

[発見経緯別]



【解説】

前立腺がんの5年生存率をみると、病期の進行に従い減少している。発見経緯別では、がん検診で発見された場合、明らかに生存率が高く、経過観察中と自覚症状等ありの2つのグループと比べると約1.2倍良好な結果であった。

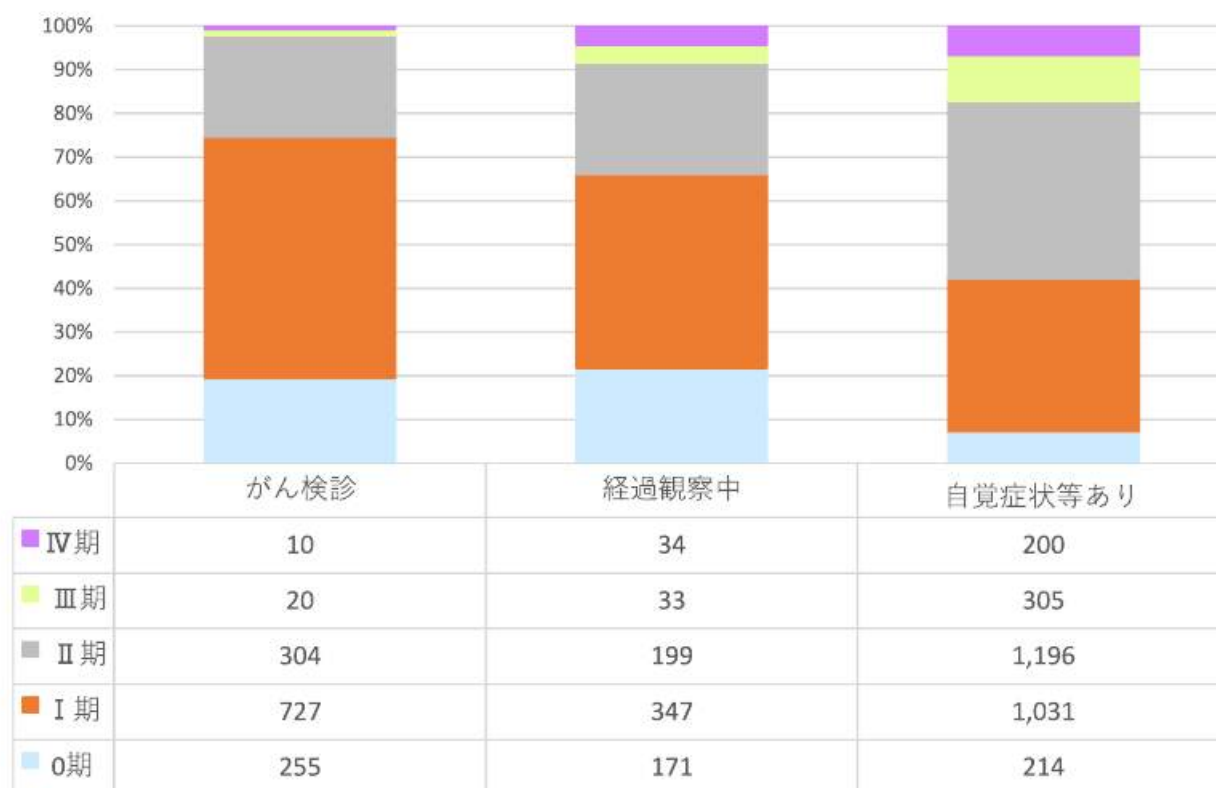
福岡県がん診療連携協議会がん登録専門部会

院内がん登録データ解析 【乳腺】

◎検診でみつける乳がんの進行度（臨床病期）

臨床病期	0期	I 期	II 期	III期	IV期	総計
がん検診	255	727	304	20	10	1,316
経過観察中	171	347	199	33	34	784
自覚症状等あり	214	1,031	1,196	305	200	2,946
総計	640	2,105	1,699	358	244	5,046

※ がん検診・・・健康診断、人間ドックを含み、乳がんが検診で見つかった症例
 経過観察中・・・他の疾患のフォロー中に、がんの症状がない状態でみつかった症例
 自覚症状等あり・・・しこりや乳房にえくぼやただれ等、自覚症状が有り、がんが見つかった症例

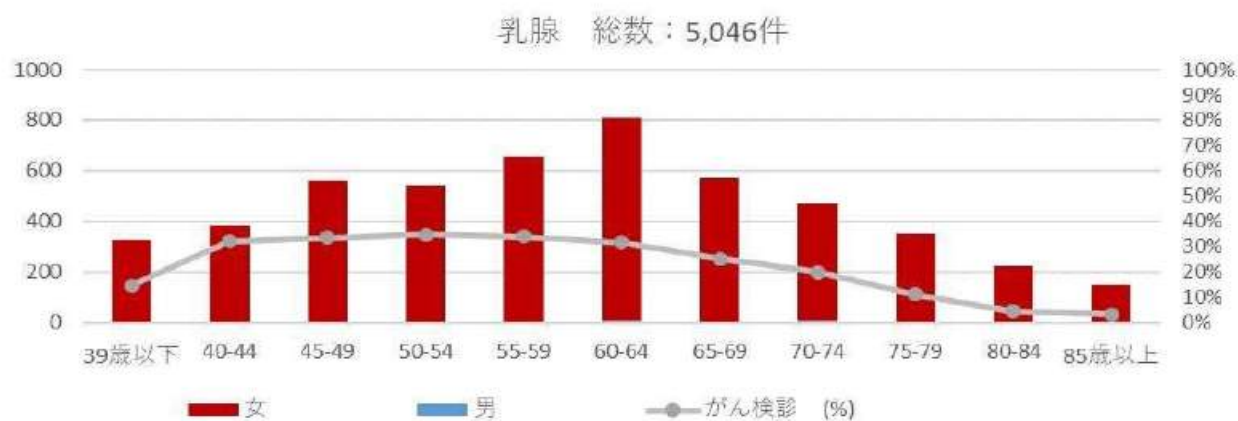


【解説】

3年間の対象症例数は5,046件で、がん検診での発見数は1,316件（26%）、経過観察中での発見数は784件、自覚症状等ありでの発見数は最も多く2,946件であった。

がん検診で発見された場合、臨床病期0期・I期で75%、IV期が1%であったのに対し、自覚症状等ありで発見された場合は、臨床病期0期・I期が42%、IV期が7%であり、がん検診で発見された場合、早期のがんが多く発見されていることが確認された。

◎乳がんの年齢別・性別発生数とがん検診による発見率



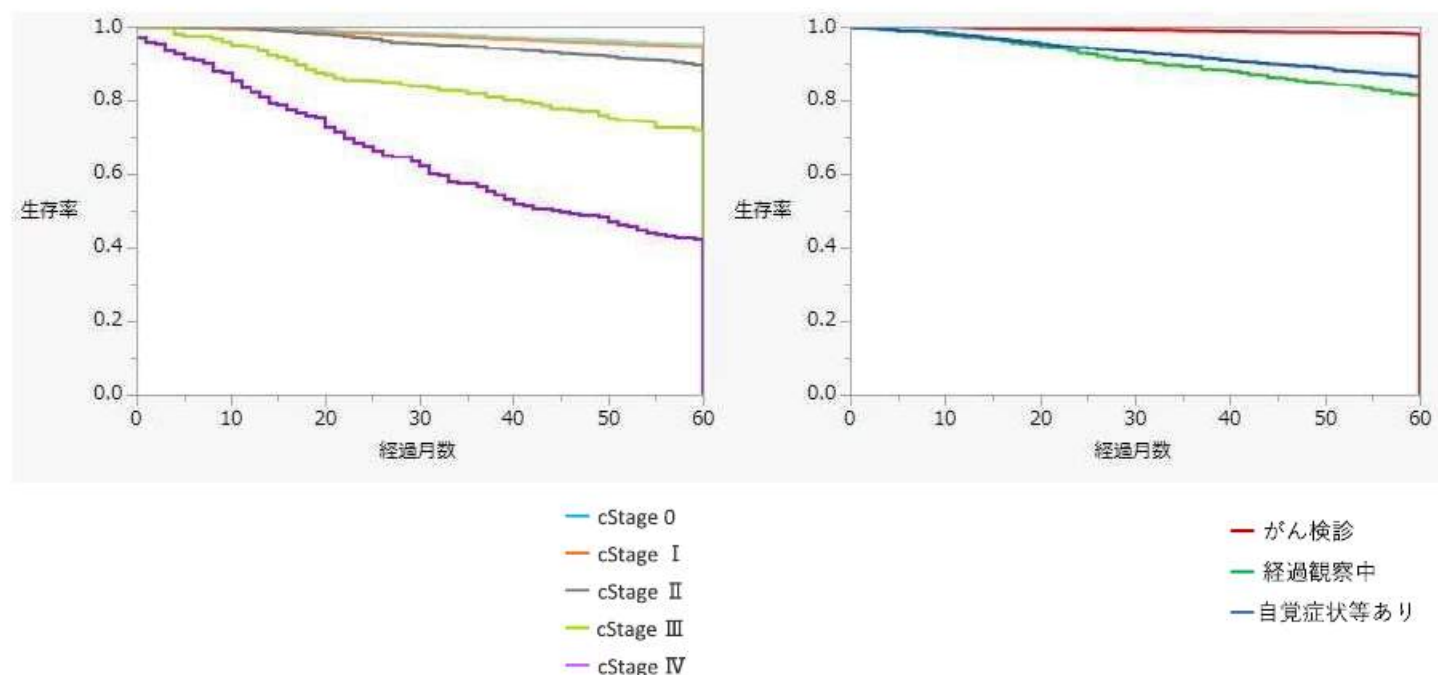
【解説】

乳がんの発生数は、99.5%が女性となっている。年齢階層では40歳代後半から増加している。一方、がん検診による発見率は、40代前半から60歳代前半まで30%台で推移しているが、60歳代後半からは、明らかに減少している。

◎生存率 ※打ち切り126件除く

[臨床病期別]

[発見経緯別]



【解説】

乳がんの5年生存率をみると、臨床病期0期からII期では90%程度と高い。発見経緯別では、がん検診で発見された場合、98%と非常に高い生存率であった。

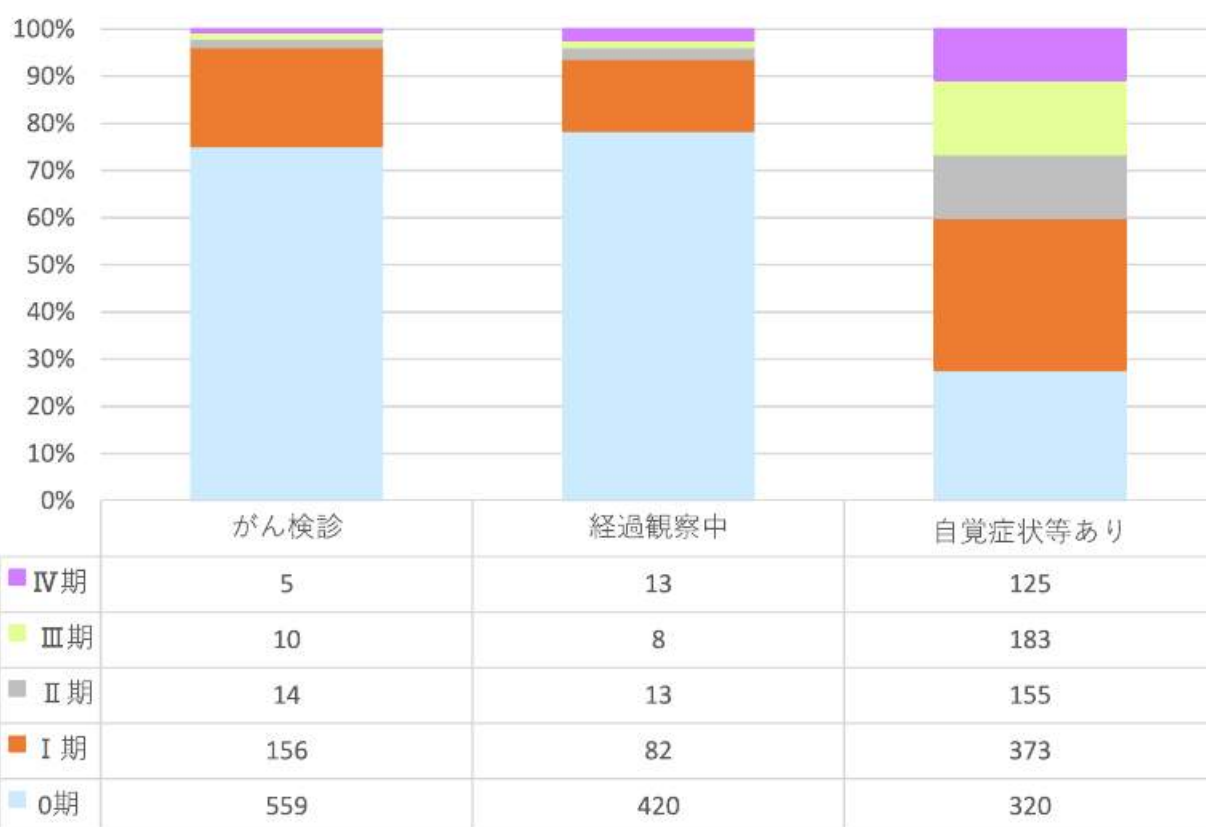
福岡県がん診療連携協議会がん登録専門部会

院内がん登録データ解析 【子宮頸部】

◎検診でみつける子宮頸がんの進行度（臨床病期）

臨床病期	0期	I 期	II 期	III期	IV期	総計
がん検診	559	156	14	10	5	744
経過観察中	420	82	13	8	13	536
自覚症状等あり	320	373	155	183	125	1,156
総計	1,299	611	182	201	143	2,436

※ がん検診・・・健康診断、人間ドックを含み、子宮頸がんが検診で見つかった症例
経過観察中・・・他の疾患のフォロー中に、がんの症状がない状態でみつかった症例
自覚症状等あり・・・不正性器出血やおりものの増加等、自覚症状が有り、がんが見つかった症例



【解説】

3年間の対象症例数は2,436件で、がん検診での発見数は744件（30%）、経過観察中での発見数は536件、自覚症状等ありでの発見数は最も多く1,156件であった。
がん検診で発見された場合、臨床病期0期・I期で96%、IV期が0.7%であったのに対し、自覚症状等ありで発見された場合は、臨床病期0期・I期が60%、IV期が11%であり、がん検診で発見された場合、早期のがんが多く発見されていることが確認された。

◎子宮頸がんの年齢別・性別発生数とがん検診による発見率



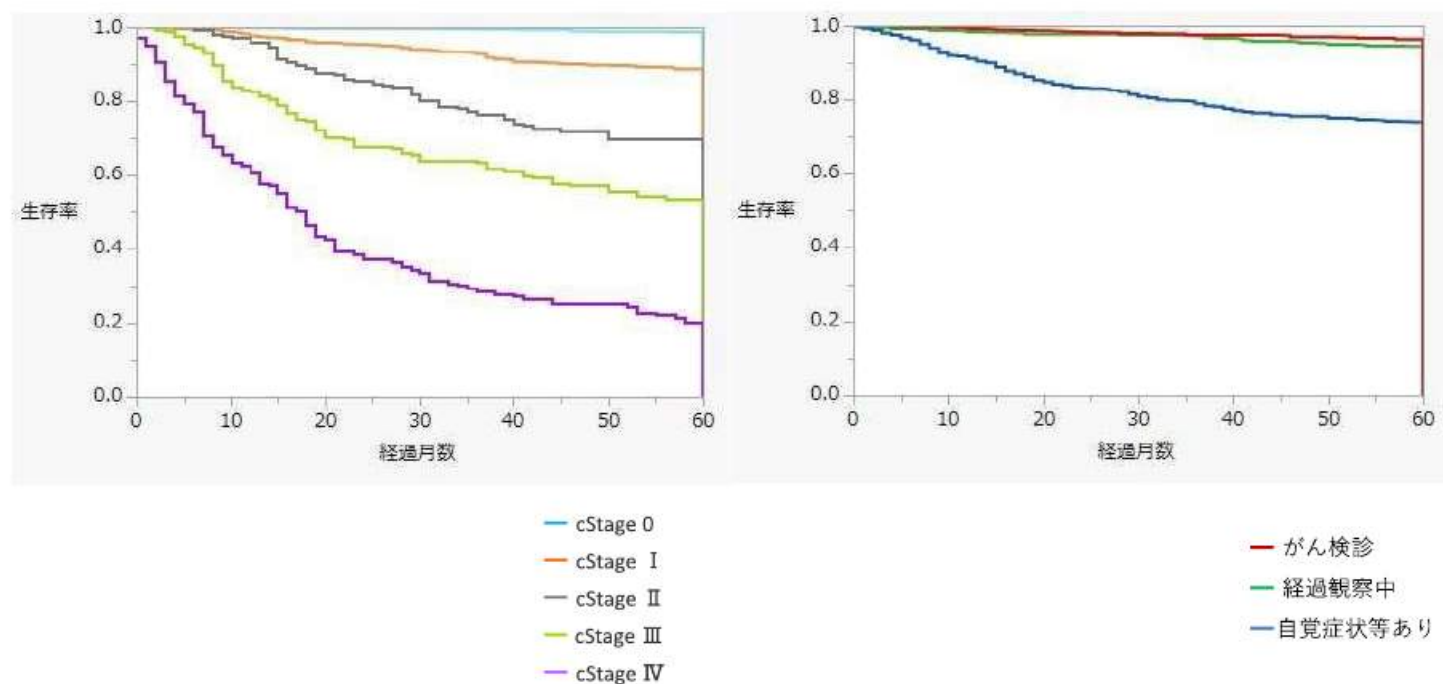
【解説】

年齢階層では30歳から増加しており、30歳代後半がピークとなっている。がん検診による発見率は、29歳以下から30歳前半で33%、40歳代前半の43%がピークとなっており、発生数の多い年代のがん検診による発見の割合が比較的高い。

◎生存率 ※打ち切り217件除く

[臨床病期別]

[発見経緯別]



【解説】

子宮頸がんの5年生存率をみると、病期の進行に従い減少している。発見経緯別では、がん検診で発見された場合と経過観察中で発見された場合の生存率は同等で、自覚症状等ありと比べると約1.3倍良好な結果であった。

福岡県がん診療連携協議会 院内がん登録解析 参加施設一覧

地区	病院名
<福岡ブロック>	九州大学病院
	九州がんセンター
	九州医療センター
	済生会福岡総合病院
	福岡大学病院
	福岡東医療センター
<筑後ブロック>	久留米大学病院
	聖マリア病院
	公立八女総合病院
	大牟田市立病院
<筑豊ブロック>	飯塚病院
	社会保険田川病院
<北九州ブロック>	北九州市立医療センター
	JCHO九州病院
	産業医科大学病院
<行政>	福岡県保健医療介護部 がん感染症疾病対策課